

【旧約聖書日課】ヨシュア記 3章1～8節

¹ヨシュアは、朝早く起き、イスラエルの人々すべてと共にシティムを出発し、ヨルダン川の岸に着いたが、川を渡る前に、そこで野営した。²三日たってから、民の役人は宿営の中を巡り、³民に命じた。

「あなたたちは、あなたたちの神、主の契約の箱をレビ人の祭司たちが担ぐのを見たなら、今いる所をたって、その後につけ。⁴契約の箱との間には約二千アンマの距離をとり、それ以上近寄ってはならない。そうすれば、これまで一度も通ったことのない道であるが、あなたたちの行くべき道は分かる。」

⁵ヨシュアは民に言った。

「自分自身を聖別せよ。主は明日、あなたたちの中に驚くべきことを行われる。」

⁶ヨシュアが祭司たちに、「契約の箱を担ぎ、民の先に立って、川を渡れ」と命じると、彼らは契約の箱を担ぎ、民の先に立って進んだ。

⁷主はヨシュアに言われた。

「今日から、全イスラエルの見ている前であなたを大いなる者にする。そして、わたしがモーセと共にいたように、あなたと共にいることを、すべての者に知らせる。⁸あなたは、契約の箱を担ぐ祭司たちに、ヨルダン川の水際に着いたら、ヨルダン川の中に立ち止まれと命じなさい。」

【使徒書日課】使徒言行録 10章34～48節

³⁴そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。³⁵どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。³⁶神がイエス・キリストによって——この方こそ、すべての人の主です——平和を告げ知らせて、イスラエルの子らに送ってくださった御言葉を、³⁷あなたがたはご存じでしょう。ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。³⁸つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人々をすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。³⁹わたしたちは、イエスがユダヤ人の住む地方、特にエルサレムでなされたことすべての証人です。人々はイエスを木にかけて殺してしまいましたが、⁴⁰神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現していただきました。⁴¹しかし、それは民全体に対してではなく、前もって神に選ばれた証人、つまり、イエスが死者の中から復活した後、御一緒に食事をしたわたしたちに対してです。⁴²そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。⁴³また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる、と証ししています。」

⁴⁴ペトロがこれらのことをなおも話し続けていると、御言葉を聞いている一同の上に聖

霊が降った。⁴⁵割礼を受けている信者で、ペトロと一緒に来た人は皆、聖霊の賜物が異邦人の上にも注がれるのを見て、大いに驚いた。⁴⁶異邦人が異言を話し、また神を賛美しているのを、聞いたからである。そこでペトロは、⁴⁷「わたしたちと同様に聖霊を受けたこの人たちが、水で洗礼を受けるのを、いったいだれが妨げることができますか」と言った。⁴⁸そして、イエス・キリストの名によって洗礼を受けるようにと、その人たちに命じた。それから、コルネリウスたちは、ペトロにお数日滞在するようにと願った。

【福音書日課】ルカによる福音書 3章15～22節

¹⁵民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。¹⁶そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。¹⁷そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」¹⁸ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。¹⁹ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、²⁰ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。

²¹民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、²²聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

《主の洗礼》【こども説教のために】

「降誕祭」の装飾の中で年末年始を過ごした教会も、「公現日」(1月6日)にはすっかり通常の装いに戻されました。「公現」後の期節、教会は、主イエスの「公生涯」に目を向けて過ごします。その最初に、教会は古くから、「主の洗礼」を記念してきました。「福音書」が、主イエスの宣教のお働きを「洗礼」の出来事から順に伝えているとおります。

主イエスは、「洗礼者」と呼ばれるヨハネから洗礼をお受けになりました。それは、**およそ三十歳**のころのことだったようです(ルカ 3:23)。それまで、主イエスが何をなさっていたのかは、知られていません。降誕の出来事や少年時代の逸話を除いて、福音書は何も伝えていないのです。それは、隠されているわけではないのですが、知る必要もないのでしょうか。主イエスがお示しくださる生き方は、ただ洗礼から始まることだからです。

そのとき、主イエスは、**聖霊**をお受けになりました。「これはわたしの愛する子」という天からの声をお聞きになりました。

この主イエスの洗礼を、弟子たちは、教会の洗礼として受け継いできました。ただ、聖霊を受けた者として、「神の愛する子」と呼ばれる者として、生き始めるしるしとなる洗礼です。誰もが、この洗礼へと招かれています。

皆洗礼を受け…

わたしが洗礼を受けたのは、高校 2 年生のクリスマスでした。両親は教会で青年時代を共に過ごして結婚した信者夫婦でしたし、両祖母も、また曾祖母も信者でしたが、幼児洗礼を受けることもなく、また信者になることを強いられることもありませんでした。そもそも、幼児洗礼を積極的に勧める教会ではなかったのでしょうか。いわゆる「二世」であっても皆、自分自身で決断しなければ、洗礼を受けて信者になることはなかったのです。とは言っても、皆が一大決心をして信者になったわけではなかったと思います。わたし自身のことと言えば、牧師と立ち話をした際に、同じく高校 2 年生のときに洗礼を受けていた兄を引き合いに出されて、「どうするの」と問われ、思わず「受けます」と答えてしまった、というのが真相です。

わたしの洗礼式には、もう一人ご婦人が志願者として並んでいました。私の両親が青年時代に臨んだ洗礼式では、多い時には一度に三十人も志願者が並んだと聞かされていましたが、二人だけというのは少し寂しい人数です。それでも、一緒に洗礼を授けられる人がいたという事実は、わたしの中では大きなことでした。洗礼が、孤独な決断ではなく、同じ道を歩む人を見出すときとなったからです。

主イエスが洗礼をお受けになられたときのことを、「福音書」は、「**民衆が皆洗礼を受け**」と描くことから始めています。多くの人が洗礼者ヨハネのもとに来て、共に洗礼を受けていたのです。「福音書」の原文では、「その人々のただ中で」主イエスは洗礼をお受けになられたと、表現しています。多くの人が洗礼を受ける中に、主イエスがいらっしゃって、同じように洗礼を受けられたのです。何も知らなければ、その洗礼を受けようとしている人々の中に主イエスがいらっしゃるとは、わからなかったのではないのでしょうか。けれども、その中に、主イエスはいらっしゃるのです。

教会が一人の人に洗礼を授けるとき、わたしたちは、その人の傍らに、その人の中に、あの主イエスの姿を見ているのです。洗礼を受けようとしている人々の中に紛れている主イエスです。そこに、主イエスはいらっしゃる。そして、その人の洗礼が、あの主イエスの受けられた洗礼と同じものになるようにしてくださっている。そこで主イエスは、洗礼を授ける教会に連なる者らを誘ってくださっているのでしょうか、その人が聖霊を受けた者として生き始め、「神の愛する子」と呼ばれて生き始めることができるようにと。

たとえ洗礼に臨む志願者が一人であっても、教会は、すでに洗礼を受けた者たちの交わりです。洗礼にしるしづけられた者たちの中に、洗礼を受けられたあの主イエスがいらっしゃるのです。このお方は、教会の中に紛れてしまっているかもしれませんが、確かにいらっしゃるのです。

「あなたはわたしの愛する子」

牧師という働きに就かせていただいている者にとって、洗礼志願の申し出をいただけるときほどうれしいことはありません。洗礼式で志願者の頭に水を注ぎ、手を按いて祈るという役割が、もっぱら牧師に委ねられていることを、きっとどの牧師も手放したくないと思っているはずです。それは、譬えが悪いかもしれませんが、母の胎から生まれ出ようとしている赤子を取り上げる者の喜びのようなものなのです。

主イエスが洗礼をお受けになられたとき、聖霊が見える姿で降って来た、と「福音書」は伝えています。洗礼は、見えない神のお働きが見える形になったしるしなのです。主イエスの洗礼でさえ、そうなのです。主イエスご自身の決断や働きによってではなく、神のお働きによって何かが始まる。洗礼は、そのしるしとされたのです。

赤子の誕生を考えてみれば、それは当然のことです。母の胎で育ち、月満ちて生まれてくる赤子は、自分自身の決断や努力によって生まれ出てくるわけではありません。その命と共に備えられたもの、母体と赤子、そして取り上げる者の調和が達せられたところで、赤子は、この世へと生まれ出てくるのです。そこに、神秘を感じない者はいないでしょう。確かに、「子は授かりもの」として生まれ出てくるのです。わたしたちの信仰の言葉で言えば、「神が恵みとして与えてくださる」のです。

ただ、わたしたちは、わが子の場合、いつまでもそのように考えていないかもしれません。「神が託してくださった子」であるはずなのに、いつのまにか、神ではなく親の思いを押し付けて、苦しめてしまっていることが、少なくないのではないかと、わたしは、常々反省せずにはられません。

そうであればこそ、わたしたちは、わが子をこそ、洗礼に導くべきです。身近な者をこそ、洗礼へと誘うべきです。その人を、主イエスの洗礼に託して、神の恵みのお働きの中に置き直すのです。洗礼を受けた者たちの交わりの中で、「あなたは神の愛する子」と呼ばれる者として生きることができるようになるのです。もちろん、それを強いることはできませんが、わたしたちは、だれであろうと人を洗礼から遠ざけてはいけません。

洗礼へと招かれて来られたすべての皆さん。

皆さんは、「神の愛する子」なのです。洗礼は、あなたにも神の愛が注がれていることのしるしなのです。「あなたを愛する」と宣言してくださる神の贈り物なのです。

わたしたちも、すべての人に、洗礼を愛の贈り物として授けるのです。神が「あなたはわたしの愛する子」と宣言されたように、わたしたちも、「あなたを愛する」と宣言し続ける約束として、洗礼へとお招きするのです。